

「セガン」に向かい合って

元学習院大学教授 川口 幸宏

I 2005年7月2日、埼玉大学名誉教授・清水寛氏の編著書『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』(全4巻、日本図書センター、2004年)の出版と、同書を対象として日本社会事業史学会から文献資料賞が授与されたことをお祝いする会が、東京・豊島区の学習院大学文学部大会議室を会場として開催された。100人近くの参加を得た盛会だった。会の結びに、清水寛氏がやや興奮した口調で、2012年のセガン生誕200周年記念としてクラムシーで国際的なセガン研究シンポジウムが開催されるだろう、日本のセガン研究の到達を発表する意向である、とご発言になった。新しいセガン研究の踏み出しが、こうして宣言されたのであり、「日本セガン研究会」という会則を持った団体がその場で出発した。私に事務局の役割を果たすように命じられた。

「日本セガン研究会」がどのような活動をしたかと言えば、会報『セガン研究報』を発行したのみであり、執筆者も多くいたと言えば聞こえがいいが、それは最初の数号のみで、ほとんどが川口の個人通信のようなものであった。これまでのセガン研究にない新しい史料発掘に基づいて、歴史エッセイ風に綴ったが、会員や読者の反応はほとんど無かった。正直に言えば、「ああ、セガンはもう終わったんだな」と思わされ、とてもではないが、「2012年の生誕200周年記念国際シンポジウムをクラムシーで開催する一翼を担い、セガン研究の新しい到達を発表する」など、万に一もあり得ない妄言なのだと、諦観に支配されるようになった。

そのような中で、私にはまったく未知の世界からの強い反応が寄せられた。日本育療学会でご活躍で、病弱児教育史の研究を精力的に続けておられる桐山直人氏から、育療学会小規模研修会でセガン研究について報告しないか、というお誘いをいただいた。その日が2008年10月18日。これまでのセガン研究の史資料的ずさんさを指摘し、新しく発掘した当事史料を基にした報告は、それなりに好意的に受け止められたと思っている。

研修会での報告に勢いを得て、2009年度に予定された内外研修の課題にセガン研究を据

え、研修の場の一つにフランスを加えた。

そして、この研修では、それまで考えもしなかったような史料収集が実現した。セガンのフランス時代の実際(生育環境、公的機関における活動、革命参加等)を証拠づけることができる公文書やそれに類する史料の発掘が多々できた。この在外研修の成果は、『^イ知的^デ障害^イ教育の開拓者セガン～孤立から社会化への探究』(新日本出版社、2010年)として纏めた。拙著に対して寄せて下さったお声は、一、二を除いて、とてもありがたいものであった。

その内のお声より。

「若かりし頃の輝きを失ってしまったあなたはそれだけの人でしかなかったのかと思っていましたが、この著書であの輝きが本物であったことが分かって、とても嬉しい」と研究者としての資質に言及下さった志摩陽伍先生。また藤井力男氏がフランス教育学会紀要での拙著書評で「本書により解明されたセガンの実像は、サン＝シモニストとして位置づけられてきた理解よりも、はるかに実践的で、『社会権』、『労働権』の実現を求めた、果敢な青年であった。イディオ兒の教育方法の開発にあたっては、子ども自身の能動性を引き出すべく努めただけでなく、それをさらに『公的な機関』で実践すべく、自ら関係大臣に直訴するという、きわめて論理的で意欲的な青年であった。……国際的に高く評価されるだろう」と研究内容に言及下さった。

II だが、「いずれにしてもセガン研究を終息するべきだろう」という心には変わりなかったが、2009年の在外研修中に訪問したセガン生誕の地クラムシーの「クラムシー科学芸術協会」会長ルモアーヌ氏から、セガン生誕200周年にあたる2012年に記念のシンポジウムを開催したいが、どのようなテーマがいいか、どのような人選がいいか、日本から参加が可能か、との問いがなされた。清水寛氏編著の大著がクラムシーに寄贈されたのは2004年、第1巻冒頭には当時クラムシー市の市長のバルタン氏が寄稿しておられる、そして私が2003年以降たびたびクラムシー入りし調査をしている、そういう事情などから、ルモアーヌ氏から問いかけがなされたわけである。国際シンポジウム開催の一翼を担うことな

どできるはずはないが、あれこれと提案し、日本からは少なくとも清水寛氏と川口が参加する、と回答した。

さあ、我が日本でも、可能ならばセガン生誕 200 周年記念の催しを何かできるようにしたいものだ。2012 年に向けて、とりあえずできることは、休刊状態にあった『セガン研究報』を再刊し、国際シンポジウム開催の情宣をし、せめて記念誌の刊行をしよう。それが、あまりにも遅れてきたにせよ、とりあえずは自称セガン研究者が後世代にバトンタッチすることの責任であろう。

このうち、「記念誌」は『セガン研究報』通算第 8 号、特集「セガン生誕 200 周年記念」、発行：2012 年 1 月 20 日（セガン生誕の月日）として刊行ができた。全 108 頁。200 部発行。執筆者とタイトル等：

竹田康子「モンテッソーリ教育におけるセガン教具の継承と発展」、

村山拓「アメリカにおけるセガン像の解明に向けて」、

川口幸宏「旅路—オネジム＝エドゥアール・セガン その生誕からフランスを去るまでの光景」、

瀬田康司「「子ども期」をどう捉えるか」、

川口著書（前出）書評：東海林篤、桐山直人、藤井力男、神郁雄、清水寛

セガン生誕 200 周年記念国際シンポジウムは、2012 年 10 月 28 日 29 日に開催された。結局、日本からは私だけしか参加する者はおらず、この件に関する問い合わせも 1 件もなかった。ああ、セガンは本当に終わった人なんだなあ、と痛感させられたものである。このことと併せて感じたことは、私のセガン研究に興味・関心を寄せて下さる人たちは、「セガン」そのものにあるのではなく、私の主たる研究方法・フィールドワークにあるのだ、ということだった。事実、「セガン研究の足跡を辿る旅」が企画・実施された。2012 年夏のことである。

シンポジウム当日、セガンの半生史を博士論文に纏めたジャン・マルタン氏（医学博士、パリ在住）と、セガンの生育史に関して情報交換し、氏の研究課題と私のそれとが近似し

ていることを知った。氏も「これまでは、なんと誤りの多いセガン半生史か」と、シンポジウムの基調報告の冒頭で述べていた。その氏でさえ、基調報告の中で、「ムッシュ川口の研究から、セガンが出された里子先のオセールの祖母の家が実在すること、セガンが1848年革命当時に労働者のクラブという集まりを組織していたことなど、史料を添えてあるので、貴重な史実を知ることが出来た。セガンが共和派の活動家であったことが史実として確定できるし、その他セガンの未解明の部分に分け入るための貴重な事柄が示唆された、これまでにない研究だ」と、私の研究を評価した。つまり、セガンを産み育てセガンの教育研究から多くの果実を摘み取ってきた母胎であるフランスにおいてさえ、日本在住の、しかもセガン研究ではぽっと出の私の気づきが意味を為すという、研究実体なのだ。

III このシンポジウムをもって私のセガン研究の約10年の「旅」は終わるはずであったが、障害児教育（史）研究者でない私にとってのセガン研究の課題は何なのか。せめて幕引きのための弁だけは残しておきたいと思い立ち、パリ・コミュニケーション研究で課題としてきた「教育の権力的なものからの自立」とつなぐ意志で、セガンは「白痴の教師」という専門職自立を果たそうとした先駆けであるという視点から、論理を建てて、綴り直した。

これは、直接には、日本育療学会機関誌『育療』に随意題寄稿という機会を与えていただいたことをきっかけにして、かねてから心の内にあった、セガンの19世紀的位置づけを明らかにしたい、という課題意識を公刊することへ進んで行く。『育療』第50号（2011年3月）『『イディオの教師』の誕生とその意義』という論題に纏めた。そして、その時より数年後、先のパリ・コミュニケーション研究の課題意識と結びつけたのが、『一九世紀フランスにおける教育のための戦い セガン パリ・コミュニケーション』（幻戯書房、2014年）との書名で出版の運びとなった。本書はその刊行が、たまさか、私の学習院大学退職時と重なったため、本人の真意とは別に、退職記念の書であるかのようにみなされている。

これで、私はセガン研究の重荷を下ろすはずであった。そして、フランス社会文化史の研究に身を投げ込む準備を始めた。

しかし、重症の病（脳梗塞による左半身不全ならびに構音障害）を得たため、フィールド

ワークを伴うフランス社会文化史の研究は断念せざるを得なくなった。2014年3月末からの自宅療養の傍ら、他に課題も見いだせず、かといって他にやることも見いだせず、また不可能でもあり、心身の命をつなぐために何とか見いだしたのが、セガン研究の再整理であった。二つの著作の間違い探しから入り、研究課題になり得るかどうかの検討を加え始めた。2012年のセガン生誕200年記念国際シンポジウムは、格好の材料である。私のシンポジウムの報告文は拙著『一九世紀フランスにおける教育のための戦い セガン パリ・コミュニケーション』（幻戯書房、2014年）に収載したが、著書上には書き表せなかったことも多くある。

私は、どうしても、セガンの生育史にこだわりを持つ。19世紀論としてセガンを素材にしたいという思いがまだまだ強く内在しているのだ。

ところで、シンポジウムを総括的に捉え直しているうちに、セガンを産んだと言って誇りを持ち、1980年には「セガン没後100年祭」を主宰し（これには日本からも、大井清吉氏—故人—、松矢勝宏氏他の参加があったようだ）、2012年には「セガン生誕200年」祭を主宰したクラムシーのセガン認識が、なんとお粗末なことよ！と気づいた。まさに、ジャン・マルタン氏の基調報告の冒頭の辞「なんと誤りの多いセガン半生史か」の様態なのだ。

シンポジウムのプログラムに載せられた主催者挨拶文（クラムシー市、クラムシー市メディア・センター共催）に、セガンの経歴の概略が綴られている。その部分を再録しよう。

「エドゥアール・セガンはクラムシーの出身である。1812年にオー・バ・デュ・プティ・マルシェ通りに生まれた。その地域圏で長く続く家柄の出自であった⁽¹⁾。父と叔父は医師であった。セガンはオセールで中等教育の学習の第一歩を踏み出し、続いてパリのリセ・サン＝ルイで終えている。

1830年に法学部に学籍登録をしているが、これといった信念に基づくものではなかったと思われる。実際、そのわけもほとんど分かっていないが、1837年に、父の友人でありアヴェロンの野生児の教育者として著名な、医師ジャン・イタルの好意の下で、一人の白痴の子どもの教育に取りかかった。この取り組みは著作『H氏へ・・・私が14ヶ月

間行ってきたことの要約』(1839)に纏められた。1839年には、ゲルサンとエスキロールによる一編の好意的な報告が、セガンに、セヴル通りの不治者救済院⁽²⁾の障害のある子どものクラスでその方法を当てはめる道を拓いたのである。一方で⁽³⁾、ピガール通り6に私設を開いた。1842年にビセートルの門が彼に開かれるまでに、セガン教育は大医学者の間で知られるようになる。しかし、改革者は決して受け入れられることはなく、逆に、無視、嫉みに見舞われた。それ故セガンは1843年に職場を離れるが、罷免されたのかそれとも辞職したのか?⁽⁴⁾

セガンの職業経験はいずれも緻密な作品の対象となっている。とりわけ『遅れた子どもと白痴の子どもの教育の理論と実践』(1842)と『白痴と他の遅れた子ども…の精神療法、衛生および教育』(1846)はよく知られている。

1850年、彼はアメリカ合衆国に渡った。その地では彼の方法がよく知られ高く評価されていた。彼はその地で大きな成功を収めた。オハイオ州で10年過ごした後ニューヨークに身を落ち着けた。1861年にはニューヨーク市立大学に職を得た。

1862年にアメリカ医学協会のメンバーに任ぜられた。当時彼は検温に関心を強めており、1876年に著した著作『医療検温と人の体温』で、医療への導入の優位性を強く論じている。

最後に、エドゥアール・セガンは1873年のウイーン国際博覧会にアメリカ教育代表者として派遣された。その際彼はヨーロッパの様々な教育制度に関心を強めて調査している。

1880年ニューヨークで死去。」

上記引用中付したカッコ書き数値部は誤りあるいは不確実理解を誘発する記述である。これらについて、付した数字順に解題しておきたい。

(1) セガンの告別式(1880年、ニューヨーク)で、セガンの友人ブロケット博士が述べているところを援用したと思われる。地域で代々有力な医師の家系という説は、多くのセガン研究者によって無批判に引用されてきているが、私は、セガンの家系調査に入り、この説—それが医師の家系ではないにせよ—は誤りであることを、史料を添えて実証した。前

記の『セガン研究報』第8号に寄稿した「旅路—オネジム＝エドゥアール・セガン その生誕からフランスを去るまでの光景」がその文献である。父はクラムシー出身ではなく医師としての入植者であること、母も結婚によってクラムシーに入ったこと、祖父母は父方母方共に、クラムシーとは無縁であること、またそれぞれの上世代はさらに別の地域の出身であることを、戸籍調査等で明らかにしている。

(2) セガンがセヴル通りの不治療者救済院で白痴教育を展開したというのは、ブルヌヴィルが、1889年7月12日のフランス下院で行った法律提案の中で記述されたことである。これは研究史で延々と語り伝えられてきた。この情報を起源としてセガンが「サルペトリエール院」で実践をしていた、という誤謬の論に「発展」してもいる。しかし、これについては、我が国では、まず藤井力男氏が実証的に異を唱えられ、次いで川口が、セガンは、セヴル通りの不治療者救済院とフォブール・サン＝マルタン不治療者救済院の両院に「白痴の教師」として雇用されたが、実際にはセヴル通りの方には就業しなかったことをセガン自身が『1842年論文』で明言しているし、史実も記録もそうであることを公文書を添えて明らかにしている。この解明を史料行的に行ったのは藤井氏と私だけではないだろうか。米仏の研究では見かけられない。

(3) 「一方で」という記述は、セガンの白痴教育の展開史の誤認を招きかねない。史料の確認がすでになされている事柄だが、念のために記しておく。1840年1月からピガール通りの「私設」(公認)の学校の3人の子どもの教育、1841年10月からフォブール・サン＝マルタン不治療者救済院(「学校」に相当する機関は設置されていない)に収容されていた11人の白痴の子どもたちへの教育、そして1843年1月からガビセートル救済院内の「学校」の子どもたち(正確な人数は不詳)の教育。

(4) 21世紀の幕開け以前、テュエイエ、ペリシエ両者編集『子どもの精神医学の開拓者 エドゥアール・セガン (1812-1880)』という史料集にセガンは誅首された旨の記述がなされている。川口は前記の2010年著作や論稿「旅路」において、その原史料を紹介している。

これでは、私が我が国のセガン研究史の第二期に対して行っている批判がそのまま生き

て来るではないか。要は、それほどにセガンは注目もされず、一通り舐めれば、はい終わり！という対象として研究的には扱われてきた、ということの意味しているのだろう。セガンを研究する意義と任務は何か、と、1970年代から1980年代に、研究が燃えさかった。論文も数多く生まれ、セガン原著の翻訳も出された。あえて言えば、清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流』（前掲書）は、その残り香的なものであったのだ。ただし、藤井力男氏の緻密なセガン研究を含んではいる。私の知る限り、その後にはちらちらと出されるセガン研究は、シンポジウムの主催者挨拶文から、一歩も出ていない。セガン研究第二期そのものなのだ。

IV セガンのフランス時代の作品は、可能な限り入手し、飛び飛び読みはした。しかし、巷で聞こえる「セガンはむずかしい」（翻訳書をあてにしている人たち）という声に、私は首を傾げ続けていた。「むずかしいのではない、誤解、曲解をしており、日本語としても矛盾しているのではないかと。知的障害教育史上のセガン像はもう確立しているだろうが—セガ的な教育のやり方については、とっくに伝承され発展させられていることだ—、訳本の理解や研究論文の到達では、19世紀セガン像は、けっして明確にされていない。原文は、確かにまっすぐな文章の組み立てではないけれど、網膜に光景を浮かべて考察できるほどに具体的である、という印象を持つ。セガンをセガンのままにきちんと紹介すれば、セガン研究は推進されるのではないかと、教育方法論・技術論として読むことは現代にあてはめるのに無理があるかもしれない、しかし、哲学として、歴史対象として読むには、絶好の素材ではないか。理論と実践とが同居しており、本筋が通っており、比較的ハンディな図書といえば、1843年に発表された「白痴の衛生と教育」だ。これは、当時のフランス社会の理性の塔・王立科学アカデミーで、異例な扱いとなる、高評価を得たものである。つまり、白痴教育がフランス社会の理性の塔の内部で正式に議論され、セガンの努力—人間の新しい可能性の誕生—に対して謝意が送られたのである。つまり、19世紀の理性の中にセガンの白痴教育の成果が組み込まれたのである。

ところで、セガン「1843年論文」（『1843年著書』）には、多くの子どもの臨床例が登

場する。その子どもたちの描写をていねいに読むと、救済院等公的機関に収容されていた子どもに関するそれだとは、断定も推定も出来ない描写が少なくない。白痴の子どもを取り巻く女性や男性は、そのほとんどが、貴族ないしは有資産階級の家庭の被雇用人だと想定される。第1実践のアドリアン H. はそのような境遇の子どもであったろうと推定される。セガンは H.家の家庭教師であったのだろう。

またセガンは、白痴の子どもを家庭から離して、セガンが用意した空間で教育をしている。それが第2実践と位置づけられるピガール通りのアパートを教場とした実践である。この教育施設経営には妨害が加えられたことを理由にして、セガンは損害賠償を求める裁判を起こしている。これも公文書が発掘されていることから史実として認められる。子どもの親からなにがしかの金額を受け取って教育をしていること、それが経営として成り立つとの判断に基づいて行われていた、という推定をすることが可能なのである。「様々な仕事をして」子どもたちを「扶養する」必要など、無かったであろう。

セガンの白痴教育との出会いは、ゲルサンという内科医でパリ子ども病院の院長が、パリ聾啞学校医で、「アヴェロンの野生児」の名で知られる教育実験で有名なイタールのところに、白痴の子どもの教育の相談を持ち込んだところから始まっている。ゲルサンとセガンとを結ぶ史実は何も見いだせてはいない。

セガン「1843年論文」の記述の中に、「私は、聡明であろうと白痴であろうと、青少年たちを対象にしてそのことを観察した。」という記述が見られる(第4章)。この記述から類推されることは、アクティブな行動(観察)を、知的能力を十分に持つ子どもにも白痴の子どもにも行っていた、ということであり、それが単なる瞬時の気づきではなく、ある程度の時間的経過を有したということであり、またそのことが可能な空間・場・機会を有したということである。こうした「観察」は、知的能力を有する子どもと白痴の子どもとに、同時並行的になされたのかもしれないが、むしろ、知的能力の子どもの「観察」の方が時系列的には前のことであろうと推察される。「白痴教育」はその延長でもあり、発展でもあり、進化でもあった、ということが出来るのではないだろうか。

諸史料の精読の必要はまだありそうである。